自由な女神博覧会

主　催　　村上 愛佳
日　時　　平成３０年１月１１日（木）、２月１１日(日)、３月１１日（日）
会　場　　上野恩賜公園芸術の散歩道（台東区上野公園）

この企画は、東日本大震災の津波で傷つき、撤去された宮城県石巻市の自由の女神像のレプリカを譲り受け、アート作品に再生することで女神像のあり方や今後の行方を考える現在進行形のアートプロジェクトです。

◎「自由な女神」誕生までの変遷…

自由な女神像は、石巻市の旧北上川の中州に、東日本大震災前年の2010年に建てられていたものです。宮城県出身の漫画家、故石ノ森章太郎さんの記念館があり、中洲の風景が米マンハッタンに似ていることから「マンガッタン」と地元で呼ばれていた公園のシンボルのような存在でした。設置の9か月後に襲った大津波により腰から左足にかけてえぐり取られたものの鉄の支柱のおかげでなんとか持ちこたえ、津波に耐えた「希望の象徴」などと当時話題になりました。しかし、傷んだ部分の劣化が激しく2014年に撤去されると、活用・保存しようという機運は急速に冷め、使われる当てもないまま倉庫に保管されていました。2016年にこの企画の主催者である村上さんが石巻市を介して所有者から無償で譲り受け、どこにでも行くことの出来る「自由な女神像」と名付けられ、東京藝術大学での卒業制作展で発表したのが始まりです。その後、平成 29 年 4 月から 1 年間限定で上野恩賜公園芸術の散歩道での展示が決定。

（↑）被災直後の中瀬公園の様子

今回開催した「自由な女神博覧会」は、オリジナルの女神像(現在、ニューヨークに設置)が、1878 年のパリ万博にて完成した頭部のみを展示し、全身建築の寄付を呼びかけ、約 40 万ドル相当の寄付金を集めることに成功したという歴史が根底にあります。
日本の自由な女神は今後どこに行くのか、オリジナルの女神像のように新たな地へ出発することができるのだろうか？と考えることで震災に思いを巡らせる機会にもなってほしいと考え、東日本大震災が起きた 3 月 11 日にちなみ、平成 30 年 1 月から毎月 11 日に本プロジェクトをPRする展示を実際に女神像が設置されている上野恩賜公園芸術の散歩道で開催しました。
イベント当日は、女神像がこれまで歩んできた経緯や東日本大震災・オリジナルの女神像等を説明するパネルの展示のほか、次の移設先としてこれまでにお寄せいただいた候補地を紹介する展示も行いました。また、お揃いの青いユニフォームを着用した博覧会ブースのボランティアスタッフに扮したスタッフを常駐させ、博覧会に訪れた方々に解説をしました。

（→自由な女神像と主催者村上さん）

※次のページ、当日の様子

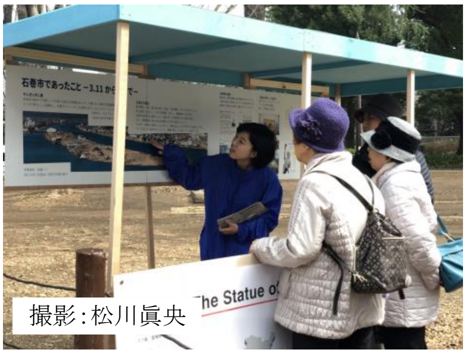
≪東北出身者の様子≫
3 月 11 日だから何か東京でも震災関係の催し物があると思ったが、今日見たのはこのイベントだけだったといったような、関心が薄れていることを心配している声もあった。

≪外国人観光客の様子≫
世界共通のアイコンである自由の女神は馴染みがあり、関心度が高かった。
展示による解説を読んだ後に、更なる詳しい情報を聞き出そうとする人が多かった。

撮影：森唯杏

撮影:松川眞央

撮影:松川眞央


撮影:松川眞央

≪台東区民の様子≫
日頃から女神像をよく見かけていると声をかけてきたり、上野公園に馴染んでいるのでこのまま常設展示を希望する声を頻繁に聞く事ができた。
11 か月という日々が地域住民の理解を深めていったことを実感できた。

≪お子さん連れの様子≫
興味本位で近寄ってくる子供に、日本に住んでいる以上経験する震災のことを知らせないといけない親の使命感があるのか、子供に熱心に説明する親の姿を多く見た。

全3回の「自由な女神博覧会」は、盛況のうちに終了しました。

女神像は、本イベント期間中に見つかった次の移設先である長野県東御市にいます。今後も、新たな移設先を募るとともに、自由な女神プロジェクトによって表出される移動の困難さや、人の差別意識、地域住民の理解といった諸問題に新たに向き合っていきます。